「占い」が学問に!?

来月から「運命学」講義

名古屋女子文化短大

当たるも八卦（はっけ）、当たらぬも八卦なの―？　名古屋女子文化短大（名古屋市東区）で十月から、全国でも珍しい「運命学」の講義が始まる。

「占い」を自己を知る手段ととらえるユニークな発想で、正式な学問として大学が取り入れるのはほとんど例がないという。

教壇に立つのは加藤主税（ちから）椙山女学園大教授。加藤教授の専門は英語、日本語学だが、同女学園大で易学研究会を主宰し、各地の文化センターで占いの講師を務めるなど、易学の専門家として知られており、同短大の白羽の矢が立った。

加藤教授によると、開講理由は「自己を知り、ライフプランを立てることを運命学からアプローチする」。自己啓発、開発の一つとして捉える。そのためにはまず、占いの功罪を理解するのが第一歩。根拠的には進路の選択を占いに頼るのではなく、自分の判断で行えるようにすることが目的となる。

講義は、半年で十五回。占いの種類や歴史、その非科学性や迷信性などの説明に始まり、後半は実践で手相の見方を教える。

加藤教授によると、占いは、竹の細い棒を引く筮竹（ぜいちく）など偶然性に頼るものと、姓名判断や占星術といった宿命的なものに分かれる。手相はその中間的な存在で、同教授は「経験的に言ってよく当たる」として講義に取り入れる。

受講するのは、同短大のキャリア秘書コース一年生の二十人が必修。生活教養コース二年生は選択で、全体で三十人程度になりそう。来年度からはさらに受講対象が増える予定という。

加藤教授は「今の若者は自分で選択することが少なく、みなの流行にとびつくだけ。実は何をやっていいか分からず占いに頼る面がある。だから占いの功罪を知って、どういう人生を送るか、理性と意思ある判断につなげてほしい」と話している。

来月から名古屋女子文化短大で「運命学」の講義をする加藤主税・椙山女学園大教授

若い女性に人気…不況で経営者も

「占い」は若い女性らの根強い支持で各地の文化講座の人気メニューとなっている一方、最近の不況を反映してか、企業の経営者が占いに頼る傾向も強くなっているという。

「占いの玉手箱」代表の竹村亞希子さんによると、以前はお忍びのように訪れる経営者が多かったが、近年は比較的堂々と事務所に訪れるようになった。経営者が引退の時期や本社の移転、さらには役員登用など人事の相談に来ることが多い。

竹村さんは「それぞれの人の運気を一つのデータとして利用して、自分の判断のよりどころにしてもらいます」という。

占いのルーツは「易経」と呼ばれ、中国の儒教の教典に書かれた帝王学の一つ。現代の心理学の中では、占いに頼る考え方などを「超心理学」と呼ぶが、日本では学会などの発表例は極めて少ない。